

『稿本天理教教祖傳』(以下『御伝』と記す)が昭和31年に公布され、中山正善二代真柱は第16回教義講習会で、「教祖が月日のおやしるのお立場で物をお伝えいただき、またひながたの親のお立場で、われわれをお導き下さった教祖をさして月日のやしるであり、ひながたの教祖であるということは、常々口にしているのです。そのお方のその御足跡、これは単なる姿の羅列であるだけではなくて、ひながたの教えであります。つまり子供としてこのひながたをいかに辿らしていただくかという点が、われわれが伝記を読ましていただく根本の心であるということをお話したいのであります。」と述べられています。

つまり、『御伝』は単に史実を学ぶための伝記ではなく、読む者が、それを自らの生活の中で実践する為に編纂されたものなのであり、言い換えれば、御伝は、「ひながた」を辿るために読んでこそ値打ちがあるわけです。

しかるに一方、『御伝』には、事実として確認できることのみが、一切の脚色をしないで記されています。“語るも涙、聞くも涙”的な言葉の端で感情に訴えるような表現はなく、起きた事柄に対する客観的な叙述以上の解説はほとんどなされていません。いわば、教祖伝としての史実・骨格のみが述べられており、一見、味も素っ気もないものになっています。

『御伝』が確定した史実のみの記述に終始され、(稿本)の二文字が冠されている理由は、教会本部より『御伝』が公刊される以前の昭和26年の著述で、故中山慶一氏が、「五十種にも及ぶ教祖伝が世に流布されておりながら、世に教祖伝なしという感じを与えているということは、いうまでもなく、本部から出されている教祖伝がないということだろうが、同時に又、今までに出版された教祖伝が、既に現在の人々の心の中に満足を与えないということである。(中略)教祖は固より絶対でおわしまし、永遠に生きておられる。しかし、教祖伝において表現された教祖は、筆者の信仰、経験、教養の広さ深さによって大きくもなり、小さくもなる。すなわち教祖伝というものは、教祖伝を描こうとの願望から生まれるものであるが、描かれたものは、所詮真の教祖ではなく、筆者の信仰に映ずる教祖でしかあり得ない。従って厳格なる意味における完き教祖伝の出現は永遠の課題として残されるであろう」と、述べられているところから推察されます。つまり、『御伝』は、権威本であるがゆえに、書き手の感情がはいらぬように記されているといえるのであります。

ところが、最初に述べたように、『御伝』は“たどるため”に読むものですから、史実を正確に知ったというだけでは十分ではありません。『御伝』に記された事柄の一つひとつにどういう意味合いがあるのか、それを如何に自らの信仰生活にいかしていくのかを読み取らなければならないのです。

筆者の父が30年ほど昔に「教祖伝から史実となって浮かび上がって来るものを出来るだけ客観的にとらえ、そしてその史実の描き出している本質的なものを見とおすこと、即ち大ざっぱにいつて、歴史的記述的教祖伝の教理化といってもよかろうと思うが、日本的、徳川・明治的なもの、即ち地域的、時代的癖、性分一因縁をぬぐい去って、ひながたの規定的なものをまとめてみることは、教祖が御身をかくされてよりやがて百年になろうという今日、そしてお道が日本を越えて世界に拡がろうと

いう今日、極めて必要であろう」と記しておりますが、その後、その言葉にそっての展開が十分になされ、現代に生きる我々がたどるための教祖伝理解が進んでいるかといえば、必ずしもそうではない状況ではないかと思えます。

何故そのことが進展しないのかという理由は、誰しものが、先述の中山氏の「筆者の信仰に映ずる以上の教祖伝は描けない」という言葉の重さに圧倒され、教祖伝を自らの言葉で語ることに躊躇するところにあると思われませんが、しかし、それでは、時代を超え、国を超えてこの教えが拡がるのが難しくなるといふ問題が残るのです。

そこで、せめて「歴史的記述的教祖伝の教理化」への素材提供というくらいは出来ないものかと、筆者が教会長をつとめていた20年ほど前に教会の月報に連載していたものを下地にして、教祖130年祭に向かう歩みに資するものを書いてみたいと思うのであります。

昭和26年の時点ですでに50を超える教祖伝が流布していたとすれば、その後発表・発刊された論文や本の類を加えると、教祖伝関係の論述は膨大な数になりましょう。従って、筆者がこれから書こうとする内容も、すでに誰かが何処かに記されていることが多いのではないかと思います。しかし、これまでに出版された教祖伝関係の全ての資料が筆者の手元に揃ってはおられませんし、仮に揃えることができて、それらの全てをくまなく読むのは至難なことです。また一方、全く新しい説だけの教祖伝研究を記すことも不可能なことから、先人の業績の上にもものを書いていることを十分に自覚しつつ、また加えて、筆者自身も今の時代と文化・文明の制約のもとにあることをも認識しつつ、その中で可能な限りの新たな教祖伝の探求ができればと考えております。

過日、筆者が教祖殿当番で着座奉仕をしておりますと、二人のご婦人が結界の前に坐られました。その中の一人は、教内でも知られた布教熱心な教会に所属する方で、筆者の息子なども憧憬する女性布教師であり、そのとなりに坐った女性は初めて参拝に来られた風情の方でありました。そして、二人で揃って参拝なされた後、その布教師の方がお連れした女性に向かって(その内容は筆者には聞こえなかったのですが)種々お話をされていますと、その相手の方が突然大粒の涙を流して泣き出されたのです。教祖のお話を聞いて感極まったのか、これでたすけて頂けると確信した涙なのか、ポタポタと止めどもなく溢れる涙をぬぐおうともせず肩をふるわせておられる姿を見て、筆者自身も感動で心を揺すぶられ、思わず目頭を熱くしたのであります。「教祖について語るとはこういうことなのだ」としみじみと思い、自分も今まで数多くの人を教祖の御前に案内したけれども、感動の涙にむせてもらうようなことは一度もなかったと恥じ入りました。

その文脈でいえば、教祖について語るには、口や筆に先行する背中が発する言葉が大事なのであり、筆者にそれが備わっているとは言い難いのですが、「歴史的記述的教祖伝の教理化」を試み記述することも、“明治が遠くなった現代人”、また“日本文化的・情緒的なものが伝わりにくい異文化圏の人たち”には必要なのではないかと考えて、『教祖伝』探求」と申しても、単なる教祖伝の一コマ一コマの私的解釈に終わるやも知れませんが、稿を起こしていきたいと思っている次第であります。